別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　鄧 軍

論文題目 ADOLESCENCE, LOVE & THE MEANING OF LIFE IN EVERYDAY TAIPEI:THE FILMS OF EDWARD YANG

論文審査担当者

主　査　名古屋大学准教授　星野　幸代

委　員　名古屋大学教授　　村主　幸一

委　員　名古屋大学教授　　ヘイグ　エドワード

委　員　名古屋大学准教授　松下　千雅子

別紙１－２

本論文は台湾の映画監督エドワード・ヤン（楊徳昌/Edward Yang,1947－2007）の遺した全七作品について、青春、愛、生と死、台北をキーワードとして分析し、それらに託されたヤンの内面世界を探求することを目的として、英文で執筆されている。以下、本論文の概要と審査結果を報告する。

［本論文の概要］

第一章ではエドワード・ヤンのフィルモグラフィーに沿って、ヤンの国際的な評価及び先行研究を紹介する。エドワード・ヤンは 1980 年代台湾ニューシネマの旗手の一人である。上海で生まれ、国民党の台湾撤退とともに渡台、戒厳令下に育ち、米国留学を経て映画界に入った。台湾の批評家は、エドワード・ヤンをテーマ性の強さとスタイリッシュな手法を台湾映画界にもたらしたと評価している。日本人研究者は、50 年間の台湾統治を反映して、エドワード・ヤン映画における日本的な要素に着目している。米国人研究者ジョン・アンダーソンは西洋の視点からヤン映画に新たな展望を示している。だが、いずれもヤンの監督としての軌跡を考える際、台湾の歴史的政治的コンテクストに重点を置きすぎるきらいがある。それに対し本論文は、以下の各章に掲げたテーマに沿って、ヤンの全作品について考察し、エドワード・ヤンの内面世界を探求する。

第二章“The Body That Hurts” は身体論とジェンダー論を駆使し、エドワード・ヤン映画における思春期の少女の表象を分析する。ヤン映画に登場する少女たちは、次のような特徴を持っている。すなわち、①肉体的に弱く傷つくケースが多く、「穢れ」を象徴し、それに抵触する男性に災厄をもたらす。②父親的な存在を求め、母親と対立する娘というエレクトラ・コンプレックスに陥っている。③フィルム・ノワールの悪女の系譜に連なり、男性を誘惑し翻弄する。その反面、男性に反抗する女は罰せられる。一方で悪女と対照を為す「天使」の役どころも用意されており、娼婦－天使の二分論の図式に当てはまる。以上より、エドワード・ヤンはミソジニストであるという結論も導かれうる。もっとも、これらの描写はむしろ、エドワード・ヤンもやはり時代社会の求める伝統的女性像に制約されていることの現れであると考えられる。

第三章“Struggling Through the Rites of Passage” は、アルノルト・ファン・ヘネップの「通過儀礼」の概念を用いて、ヤン映画における少年たちの表象を分析する。ヤン映画の少年たちが体験する異性とのキス、彼らに起こる死への衝動、また彼らの犯す殺人といった行為は通過儀礼としてとらえることができる。それらのシーンはいずれも闇夜もしくは微光で演出され、それはヘネップの用語で言えば「閾」、すなわち少年から大人への移行期＼転換期を示している。ただし、彼らは通過儀礼により閾を抜けて大人になるものの、それによって解放されることはなく、大人としての通過儀礼が彼らを待ちうけている。西洋の教養小説の構造に即して言えば、ヤン映画の少年は教養小説の主人公と同様に社会と衝突するが、必ずしも和解には至らない。その意味で、ヤン映画の少年の物語は反教養小説である。

第四章“The Bittersweet Eros” では、エドワード・ヤン映画の異性間における欲望のあり方を考察する。ヤン映画のカップルには、ルネ・ジラールの欲望の三角形、すなわち第三者の存在を通じて初めて相手への欲望が掻き立てられる関係性がしばしば当てはまる。或いは第三者の代わりに、報われない愛の痛みを伴うことが恋愛持続の条件となっている。反対に、第三者または何らかの障害ないし痛みを伴わない男女関係は持続せず破局に至るか、いずれかが自殺するというパターンが少なくない。

別紙１－２

第五章“The Wight of Being” では、実存主義の概念を用いて考察する。従来多くの批評家が、エドワード・ヤン作品はイタリアの映画監督ミケランジェロ・アントニオーニ (Michelangelo Antonioni, 1912 - 2007) 及びスウェーデンの映画監督イングマール・ベルイマン (Ingmar Bergman, 1918 - 2007) の作品に類似していると言及してきた。アントニオーニとベルイマンはいずれも実存主義に影響を受けたとされる映画作家である。しかし、これまでヤン映画と実存主義との関係は論じられてこなかった。ヤン映画には自殺、他殺、自殺未遂などの描写が多い。初期作品ではそれらがドラマティックに、或いは暴力的に描かれる傾向があったが、晩年の作品では死が日常的な描写の中で、いわば生者の身近に常にあるものとして描かれるようになる。人間はハイデガーの言う「死への存在」であることを、自ら認識する人物が肯定的に描かれる。日常生活は本来自分が「死への存在」であることに対する恐れを伴うものであり、ハイデガーの言う The One に任せてその「存在」であることに自分自身で向き合わず、思考停止という堕落に身を任せる危険性を、ヤンは警告している。ヤン自身はしばしばアントニオーニとベルイマンに比されることを否定してきたが、ヤンの青年時代はちょうど台湾の知識人が実存主義を受容した時期に相当しており、上述の通りヤン映画にも実存主義の思想が見出せる。

第六章“Lost in Metropolitan Taipei”は、「疎外(alienation)」の概念を用いてヤン映画を分析する。ヤンの初期の映画に見られる、自らの労働と存在意義とが乖離していく人物たちは、マルクスの「疎外」を体現する者として解釈することができる。台湾が急激に経済的発展を遂げる 80 年代以降を描いた映画では、マンハイムの言う「機能的合理性 (functional rationality)」が席巻する社会において、「実質的合理性 (substantial rationality)」を放棄し、その結果日常生活との親和性を失っていく人物達が描かれる。高度に都市化した 90 年代台北を舞台にした映画においては、デュルケームの唱えた疎外感、アノミー (anomie) を抱える人物であふれている。彼らは動揺し、自殺を諮り、迷信や新興宗教に走る。ヤン映画はこうした都市の疎外感を描くことにより、集団的秩序に流されず自ら思考することの重要性を喚起している。

［論文の評価］

エドワード・ヤンは「知的な思想家」と評され、その作品は哲学的だと言われながら、哲学の観点からの全作品に関する横断的な研究はこれまで皆無であった。本論文は初めてヤン映画における哲学の分析を試みており、各々の章に散見する透徹した洞察は高く評価できる。また、作品に対するスタンスという点では、台湾の映画批評家は台湾史と常に密着させてヤン映画を解釈する傾向があり、日本の映画批評家はヤン映画に表象される日本的な要素に注目し過ぎるきらいがある。それに対し本論は、米国人研究者ジョン・アンダーソンの系譜に連なり、西洋の理論を駆使し、台湾のポストコロニアルな文脈から比較的自由な立場で解釈しつつ、ヤン映画の台湾＼台北に対するメッセージを捉えたという意義がある。映像分析においても多くの興味深い観察が見出せる。

いっぽうで、本論の導入部における主旨の提示が明快でないこと、キーワードの一部については定義を更に精査することが望ましいこと、各章の完成度に比して結論部における俯瞰的考察が不足していること等が、審査員より改善点として指摘された。またフィルム・スタディーズであるからには、映像の分析に当たり更なる深度が欲しい。オーディエンス側の視点からの考察もまた発展的課題である。英語論文としては、文章表現が高い水準にある反面、形式の方は規範に則っていない

別紙１－２

点が惜しまれる。

　しかしこれらの課題は本論文の全体的な評価を損ねるものではない。本論文は、上述の通りエドワード・ヤン作品について挑戦的な試みを遂げ、ヤン研究に留まらず、台湾ないし中国語圏映画研究において優れた貢献を果たしたといえる。

従って、論文審査委員は全員一致で、本論が博士学位論文として水準に達していると判断した。